特設第一連隊の沖縄戦

沖縄戦では第二護郷隊が恩納岳に本部を置き、約2か月間にわたり遊撃戦を展開しました。2016年の広報おんなで『少年兵「護郷隊」の沖縄戦』と題して3回にわたって紹介しましたが、今回は護郷隊と共に恩納村にいた特設第一連隊を中心に、資料や住民証言を通じて紹介していきます。

特設第一連隊

連隊長　青柳時香中佐
連隊本部
（第十九航空地区司令部）約 45 人

第一大隊	第二大隊
大隊長 **黒澤巌少佐（第 56 飛行場大隊長）** **第 56 飛行場大隊** （陸軍北飛行場：読谷山村） **約 300 人** **第 503 特設警備工兵隊** **約 800 人**	大隊長 **野崎眞一大尉 (第 44 飛行場大隊長)** **第 44 飛行場大隊** （陸軍中飛行場：北谷村） **約 300 人** **第 504 特設警備工兵隊** **約 800 人** **要塞建築勤務第 6 中隊** **約 300 人** 誠第一整備隊 学生隊 **県立農林学校生徒隊 170 人**

◆特設第一連隊

特設第一連隊は沖縄戦がはじまった1945年3月23日に編成されました。伊江島にあった第50飛行場大隊、第502特設警備工兵隊も特設第一連隊の編成部隊でしたが、沖縄本島へ移転できなくなり、伊江島で戦闘することになりました。

第一、二大隊の主力である飛行場大隊は航空機の管理、航空部隊への支援、飛行場の整備という役割をもっていました。北、中飛行場の強化のため、台湾からの派遣が計画されていましたが、派遣中止となり、急遽沖縄戦直前に編成されたのがこの特設第一連隊でした。

◆米軍上陸

住民を総動員して建設した北飛行場、中飛行場が米軍上陸後に使用されないよう第一、二大隊によって破壊されました。この両飛行場に駐屯していた第56、44飛行場大隊は米軍上陸時には正面に位置し、米軍の猛烈な砲爆撃をうけることになりました。もともと砲兵部隊をもたない両大隊は、戦闘能力が脆弱な部隊で、援軍、補給もなく、武器もわずかな状態で夜間の斬り込みを行う作戦をとる他にありませんでした。その結果、第一大隊は上陸後2日目にして大隊長以下多数の戦死者を出し、部隊は分散状態となり、生き残った部隊は国頭へ移動していきます。第二大隊のうち第44飛行場大隊は米軍の攻撃によって約3分の1の戦死者を出し、米軍と交戦しながら、石川岳を経て、4月4日には恩納岳に到着しました。第44飛行場大隊に所属していた飯田邦光さんは「一人一人の自動小銃から発射されるおびただしい弾雨が私に集中する。匍匐する前後に弾が土埃をあげてブスブス、土につき刺さる」米軍のすさまじい銃撃について、戦後著した「沖縄血戦」の中で述べています。

◆恩納岳に移動

第二護郷隊岩波壽隊長は2つの中隊を石川岳に移動させ、中頭地区での遊撃戦を展開しようとしていました。その後、北、中飛行場から後退する特設第一